

「別葉」作成のために

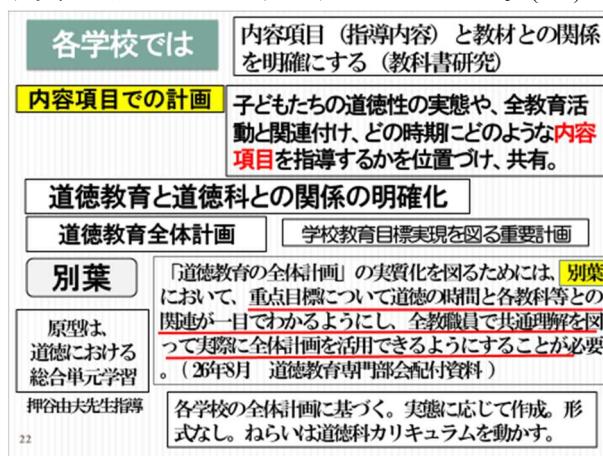
1 「別葉」とは

「べつっぱ」って何ですか？「？」しばらく思考が止まった。「（あー別葉のことか）これは『べつよう』と読むんですよ。葉は紙に通じて、別紙のことです。」そう答えると「なんだ。はじめから別紙としておけば分かるのに。」この気持ちは分からぬでもない。別紙ではなく別葉。意味があろう。

○別葉は全体計画の実質化がねらい

「『道徳教育の全体計画』の実質化を図るために、別葉において、重点目標について道徳の時間と各教科等との関連が一目でわかるようににし、全教職員で共通理解を図って実際に全体計画を活用できるようにすることが必要。」平成26年8月の道徳教育専門部会における配付資料の一節である。（太字、下線は筆者以下同じ）

重要なのは、全体計画の実質化であり、全教職員が活用できるようにすることである。（図1）



目標→計画→実施→評価はセットだということは前号で述べた。計画があってもそれが実施され、評価されて、再度の計画見直しに供さなければ、計画なんか労力をかけて作成する意味は全くない。計画は作成してありますというアリバイのためにだけあるとしたら、道徳教育推進教師の叡智も情熱も徒労に終わってしまうのである。

2 全体計画の重要性

(1) 学校教育全体の道徳教育と全体計画

道徳教育の全体計画の重要さが増したのは平成20年改訂の学習指導要領（以下、「学習指導要領」）である。はじめて、「要」という文言が用いられ、学校教育全体の道徳教育の要として道徳の時間が位置づけられた。同時に全体計画の充実が求められ、この時、「別葉」も提案されている。（注1）

だが、そもそもが、戦後の道徳教育は、全面主義道徳教育を基本として実施され、道徳の時間は、それらを補充・深化・統合する時間として展開されてきたはずであった（注2）が、それが機能しない状態がずっと続いてきた。

道徳の時間を要として描くということは、本体としての道徳教育がなければ、道徳の時間そのものがないということを意味している。実際の扇の「要」を見れば瞭然である。

これは画期的とも言ってよいが、学習指導要領では、総則はもとよりすべての教科の学習指導要領解説（以下、「解説」）で、各教科等における道徳教育の特質を解説した。学校教育全体での道徳教育は、学級経営や学校行事だけで実施するのではない。また、指導面だけでなく、理科における「生命の尊重」が象徴するように各教科等の特質において、また、内容等の関連において道徳教育は実施されているはずで、そうでなければ道徳の時間は「要」にはなりえないのである。

ここに全体計画の重要性がある。学校は、目指す子ども像の実現をミッションとしている。それを遂行するために、知徳体が構造化された自校の教育課程が編成され実施されている。道徳教育は、その教育課程を構成する重要な領域であり、全体計画は、その実効化をねらって描かれているのである。

(2) 全体計画が実質化されるために

全体計画が実質化するための条件は、まず、

教員が常に学校全体の教育活動を俯瞰し、今日の自身の道徳指導は学校教育全体の道徳教育のどこに位置しているかを認識しながら指導に臨むことである。二つは、生徒が、どのような道徳的価値に遭遇し、道徳の時間における本時の指導内容とどう関係するかを理解しておくことである。三つは、全体計画を把握しつつ生徒の道徳的成長を見つめ、全体計画そのものを全教職員で充実改善していく姿勢をもつことである。

このように全体計画をとらえていくと、全体計画は独立して存在しているのではなく、当然なこととして年間指導計画や学級指導計画を包含し、コントロールするための使命を帯びて存在していることが分かる。

(3) 全体計画の充実

平成20年の道徳教育の改善によって、各校が描く道徳教育全体計画は学習指導要領が内容等を示したこともあって(注3)飛躍的に充実した。A中の全体計画を見れば、解説に示された内容を網羅するように、中央には、学校教育目標の下に本年度の重点があり、それを受けた道徳教育の重点目標があり、学年の道徳重点目標、指導方針（以下略）、と続き、左には各教科における道徳教育の指導方針。右には生徒の実態、保護者等関係者の願い、特別活動、総合的な学習の時間、体験活動等における道徳教育の指導方針が掲げられている。十数年前の同校にはこのような全体計画は存在せず、年間指導計画も内容項目と使用する資料名のみであった。それに比べれば雲泥の差である。

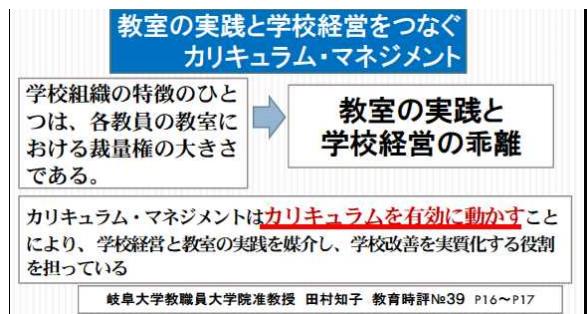
しかしながら、学校教育全体の道徳教育の実効化を図るものとして、全体計画が機能していたかと言えば、多くが4月の賑わい、6月のお蔵入りで終わっている実態が見られる。

全体計画が生きて働き、名実ともに全体計画として機能するにはどうしたらよいか。そこに「別葉」を作成する意義がある。

3 カリキュラムをマネジメントする

今次改訂ではカリキュラム・マネジメントが

前面に押し出されていることが特徴である。田村は、カリキュラム・マネジメントはカリキュラムを有効に動かすことにより、学校経営と教室の実践を媒介し、学校改善を実質化する役割を担っていると述べるが(図2)が(注4)、カリキュラムを全体計画に、教室の実践を道徳科に、そして学校改善を道徳教育の改善と置き換えれば、



田村の主張はそのままに道徳科につながる。全体計画は固定的で静的なものではない。教育課程は指導する側の計画であるが、カリキュラムは、子どもの側から見た学習と経験の全体である(注5)。全体計画をそう捉えれば、目標に基づいて、動的、可変的に扱う必然性が生じる。道徳教育及び道徳科におけるカリキュラム・マネジメントと言えよう。

4 別葉作成の意義

(1) 別葉が、計画を実質化する

別葉作成の意義は、述べてきたように、各年間指導計画や学級指導計画とのジョイント役を果たし、全体計画を実質化させるところにある。また、それは全体計画の立案、実施に全教職員が関わり、道徳教育の充実改善のフィールド役を果たす意味も有している。

(2) 別葉の記載内容と形式、その意義

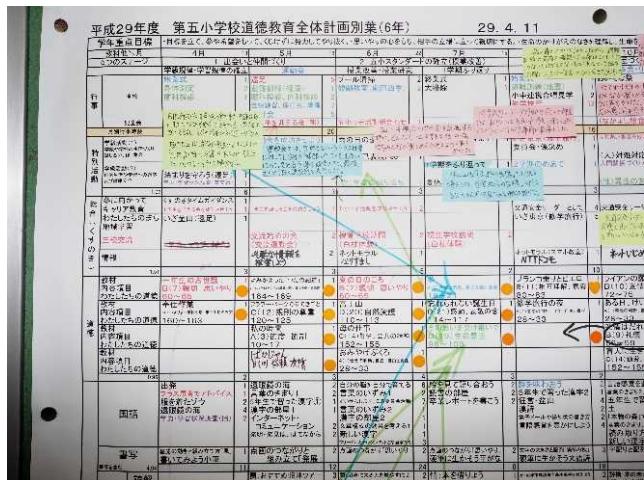
次ページの写真は、ある小学校の別葉であるが、別葉に定まった形式があるのではない。解説では、別葉に記載する内容として、次のようなことを示している。

- 各教科等における道徳教育に関わる指導の内容及び時期を整理したもの
- 道徳教育に関わる体験活動や実践活動の時期等が一覧できるもの
- 道徳教育の推進体制や家庭や地域社会等との

連携のための活動等が分かるもの

これらの内容を別葉にして加え、全体計画を、年間を通して具体的に活用しやすいものにすることをねらっているのである。(注5)

各学校の道徳教育の目標、実態を踏まえた重点等が異なれば、全体計画をはじめとする諸計画や指導も異なる。当然、別葉も異なる。例(写真)に挙げた小学校は大規模校の部類で、学年が経営母体になって学校経営に資している故



に、この別葉は年間指導計画に近いものになっているが、その形より、掲示されている別葉に全教職員がそれぞれの実践や評価等を付箋で表したり、他の教育活動との関連を道徳的視点で捉えて、気付いたことや改善点を書き込んだりマーカーを入れたりしていることに着目してほしい。こうすることで、①教職員が計画的、組織的、継続的な道徳教育を推進する一人になり、②作成した計画が計画で終わらず改善充実のP D C Aサイクルに乗り、③学校の教育活動が道徳を軸に横断的、縦断的につながれて、学校の教育課程が目標実現のための計画として機能するようになるのである。

さらに同校では、重点目標に迫るために、関連する教科等や道徳科を総合的に単元構想して、授業づくりに努めていることを紹介しておきたい。

(3)チーム学校を可能にする別葉

これらは、小学校のしかも研究校の事例ではあるが、学年が経営母体になっている中学校に

おいては、それぞれの指導や実践を可視化して統合するという意味で、「別葉」は小学校にもまして重要である。例えば、「D(19)生命の尊さ」と中学校理科における「生命の連続性」「自然環境の保全に寄与する態度」の関係のように、「道徳科と各教科等との関連が一目でわかる」ようにもなるし、「全教職員で共通理解」できるようになることがあるが、各教科等を指導しているのは、各教科担任であるから、別葉に「参加」することで、教師が教科を超えて生徒を理解する目を獲得し、学年が一体となった指導が可能になる。そして、そうすることで、学年を一つの学習集団とした指導のフィールドを得るという、副次的で重要な成果も期待できるのである。加えて、繰り返すが、全体計画をP D C Aサイクルに乗せることで、ボトムアップによる改善充実も期待できよう。チーム学校の具体である。

5 まとめ

別葉作成の意義を改めて考えると、なるほど「別紙」では趣旨が違うなと思ったところである。例示された「別葉」記載事項は、頁1枚に収まるとは限らない。各学校の全体的な重点を踏まえたとき、その経営戦略と共にどんなことを、どのように別葉にするか等、その在り方も模索した方がいい。葉は幹に養分を運ぶ。やはり別葉であったと思ったのであった。

参考

注1 中学校学習指導要領解説道徳編 平成20年3月文部科学省 p69 第4章第2節 全体計画の内容

注2 昭和女子大学大学院押谷由夫教授

戦後の教育改革と道徳教育2(2)ositani.sakura.ne.jp/worldfiles/ron001.doc

注3 中学校学習指導要領解説道徳編 平成20年3月文部科学省 P68~p69 全体計画の内容として(1)基本的事項(2)具体的計画事項が示された

注4 岐阜大学教職大学院田村知子准教授 「教育時評№39」学校図書 P16~p17

注5 教育調査研究所「展望1・2月合併号」 2015年1月) 安彦忠彦